

# 19世紀の日本におけるナイチンゲール伝

——明治期国定修身教科書におけるナイチンゲール像分析のための予備的考察——

## Biography of Florence Nightingale in 19th Century Japan

——A preparatory study for analyzing Nightingale's image in Japanese government-approved textbooks during the Meiji Era——

---

松 野 修

MATSUNO Osamu

The objective of this paper is to examine accounts of Florence Nightingale's achievements in Japan, determining whether these accounts were faithful to historical facts and whether they were presented as rationally acceptable moral models for Japanese people. During the life of Florence Nightingale, reliable biographical sources were severely restricted as she would not permit anyone to write her biography. Thus, there is a decisive change in the image of Florence Nightingale before and after Edward Cooke's work, which was an epoch-making text published after Florence's death in 1913. Florence Nightingale's story began to appear in Japanese government-approved morals textbooks in the 1910s, in the waning years of the Meiji Era. In order to determine the distinctive features of Nightingale's image as expressed in these textbooks, we must first survey as many articles as possible written about her life in other publications before her death.

In this study, we researched 26 articles. It appears that at least 8 articles presented rational explanations as to why she was appointed as the leader of the nurse party. These accounts were not only faithful to historical facts, but also presented explanations of her achievements that were rationally acceptable in terms of moral education. More significantly, there were two or three writers even in Japan who indicated clear understanding of the significance of her achievements in the history of morality. Namely, they expressed understanding that she was forced to revolt against traditional standards and that she had to create new traditions through hardship.

キーワード：ナイチンゲール，伝記，看護，道德教育，修身

## 第1章 対象資料と分析指標

フローレンス・ナイチンゲールの存命中には伝記的資料に大きな制約があった。彼女は自分の伝記を書かれることをひどく嫌っていて書簡などの資料が秘匿されたままだったからである。その事情は明治期の日本にも伝わっていた。フローレンス・ナイチンゲールが死去したのは1910(明治43)年8月。それから3年後の1914(大正3)年、エドワード・クックはナイチンゲールの従弟ヒラリー・ボナム・カーターが保管していた資料を元に公式の伝記『ナイチンゲール伝』全2巻を著した。クックのこの伝記はナイチンゲール研究における画期的な業績ともいべきもので、この伝記刊行を境にナイチンゲールのイメージは大きく変化した。たとえばリットン・ストレイチは1918(大正7)年、〈ランプを掲げる天使〉としてのイメージとは別の、〈古い因習と戦った猛々しさを秘めた女性〉として鮮烈なナイチンゲール像を描き出しているが、ストレイチのこの評伝はクックの伝記を待って初めて可能になったものである。クックの伝記によってナイチンゲールが関係者と交わした書簡類が初めて公になり、ナイチンゲールの個人的な事情やクリミア戦争から帰還後の彼女の業績が明らかになった。これによって裕福な家庭に生まれ育った貴婦人が安楽な生活を自ら放棄してまでなぜ多難な看護活動に飛び込んだのかなど、ナイチンゲールの存命中には謎に包まれていた事情が明らかにされた。ナイチンゲール像は1910年代、クックの伝記刊行を境にしてその前後では大きく異なっている。少なくともアクセス可能な資料の条件は大きく異なっている。

ところで日本の修身教科書にナイチンゲールが初めて登場したのは1900(明治33)年頃である。国定教科書の制定に伴ってナイチンゲールが高等小学1学年用の国定修身教科書に登場するのは1904(明治37)年、当時の義務教育年限最高学年にあたる尋常小学4学年用の教科書に載るのが1911(明治44)年。これらの教科書におけるナイチンゲール像の特徴を検出するにはナイチンゲール伝が教科書に収載されるよりも前に、他の出版物中でナイチンゲールがどのように語られていたのか検討する必要がある。おそらくは種々多様であったナイチンゲール伝のどの要素が教材として抽出され、どの側面が捨象されたのか。この課題を検討するにはいったんは1910年前後、即ち明治期の出版物で区切ったほうが資料の同質性を確保する上で適切である。

日本の修身教科書に描かれたナイチンゲール像を特徴づけるうえで特に重要な要素は(1)なぜナイチンゲールが看護団の一員に選ばれたのか、(2)ナイチンゲール看護団は野戦病院でどんな活動を行ったのか、という問いに対する説明である。日本で刊行された伝記ではこれらの件に関してどんな記述がなされていたか。我が国におけるナイチンゲールに関する雑誌記事、単行本の書誌については吉川龍子、金井一薫、金井きよみの研究がある<sup>1</sup>。本論ではこれに国立国会図書館所蔵の記事を加えた合計26点について検討を加えた。以下ではその中から特に注目に値する文献から、上記2点についての記述を抽出し検討する。

<sup>1</sup> 吉川龍子「明治期刊行のナイチンゲール伝記について—『婦人立志編』をめぐって—」『総合看護』1982年1号。金井一薫「ナイチンゲール関係・邦文献目録」『ナイチンゲール研究 第1号』1990年10月, pp.121-132。金井きよみ「付録 フロレンス・ナイチンゲールに関する文献目録(邦文編)」『ナイチンゲール著作集第3巻』現代社刊, 1977年, pp.501-511。

## 第2章 日本におけるナイチンゲール伝

### 第1節 ナイチンゲール伝の検討

(1)『女学雑誌』(1886a)は、「其交る所は上流社会及紳士貴女なれども、自ら寒村僻邑をめぐりあるき、病あるものあれば手を下して看病介抱し、茲にはスープを送り、かしこにはフランネルを送り、又別のところには膏薬をめぐむなど、たゞ暇あればかゝることをもて其つとめをなし」と(p.13)、ナイチンゲールが看護活動に携わった理由を〈高貴な階級に属する者の義務〉の延長として説明している。しかしクリミア戦争中に派遣された看護団の活動は〈上品な貴婦人の訪問〉とは質的に違っていた。ではなぜ裕福な貴婦人が危険な戦地に派遣されることになったのか。あまた貴婦人の候補がある中で、なぜナイチンゲールでなければならなかったのか。『女学雑誌』(1886a)の記事はこの疑問に答えていない。

(2)『女学雑誌』(1887)翌年の『女学雑誌』の記事は若い頃のナイチンゲールを次のように描く。ナイチンゲールは欧州の諸言語は勿論、古典語も習得したほど教養が高かった。「然れども嬢をして先づ其心に大なる感動を起させたるは、蓋しロンドン、エヂンバラを初として所々の都を遍歴して其地の病院を視察したる当時の有様にあるべし」(p.99)。これほどの上流階級の若い女性がこの度のような「非常の大慈善」なすに至ったのは、欧州各地の病院施設を訪問し、実状を詳に見聞したことがきっかけになったのだろうと書く。これはこれで合理的な説明である。

クリミア戦争中の活躍については「嬢の篤き志は信切の取扱に現はれ、其懇切の介抱すみずみ迄に行渡りければ」と、マクドナルドの記事を引用して〈ランプを掲げる天使〉を描き、「嬢が信切仁慈によつて療へがたき病より全快したるもの甚だ多かりし」(p.100)と、死亡率を低下させたかのように書いており、その結果〈貴婦人の訪問〉によって野戦病院の死亡率が低下したかのごとき記述になっている。

とはいえこの記事の末尾には〈ナイチンゲールの活躍が赤十字社の先駆となった〉というお決まりの説明の代わりに、次のようなたいへん優れたまとめがある。「某記者嬢を評して云く。奢美に包まれ驕富に養はれながら、其の習弊を破り出で、断然善行を為し、凡そ真正の実益なる者の人の、地位年齢階級等に付属するものにあらずして、惣てのイーブ(女の先祖)の娘が固有すべき性質なることを世に示し、且熱心忍耐及善を為さんとするの熱心等に由て成れる職業は、まことに女らしく且つ愛らしくて、富めるもの貧しきもの共に為し得べき仕事なるよしを世に示し得たるの婦人ありと云はゞ、余は則ちフローレンスナイチンゲールを以て其人なりと答へ申すべし」(pp.2-3)。この評価はナイチンゲール自身が訴えた主張に近い。

(3)『国民新聞』(1890)『国民新聞』(1890)は、成人後の活躍は幼少時から培われた心情に淵源すると説く。「熟々嬢の一生を考ふるに、後年の事業は全く其の幼時に淵源せるものなり。古老の語り伝ふる所によれば嬢の未だ幼かりし頃、日々の遊戯をなすに、常に繙帯の切れもて人形をつゝみ、いたわるさまを真似び、少しく長ずるに及んでは村の老僧が其信徒の病家を打ちめぐる毎に、嬢は必ず彼に伴なうて病める者を慰むるを常とし、或は牧者の飼犬の傷負ひたるを介抱するなどのことも珍らしからざると云ふ」(p.2)。その後の伝記でも好んで繰り返される説明である。

その後、カイゼルヴェルストでの研修とロンドンでの看護施設の管理にふれた後、クリミア戦争中の活躍について、「身を尽し心を尽しての取捌に、さしも混雑したる悪臭苦悶の窟も月を出ずして秩序立ち、便宜備はり、患者は安らかに清潔なる寝床の上に臥し、烈しき苦痛も親切の看護に半の苦しみを忘れぬ」と描く (p.2)。さらにマクドナルドの記事を引用して〈ランプを掲げる天使〉を紹介したうえで、「嬢の徳澤は畜に渠曹<sup>かれら</sup>の肉体を非命の死亡より救ひ出したるのみならず、深く其の心裡に透徹したるものありしを知るに足るなり」と、死亡率の低下に貢献したかのように書いている。

ところでこの『国民新聞』の記事にも赤十字とナイチンゲールとを関連づける記述はなく、その代わり最後に次のようなまとめが置かれている。「謙遜——寧ろ遠慮勝にして而も自信の念に篤く、温潤柔和にして而も能く人を駕馭するの力を具へ、事に当るの才幹ありて而して世の所謂女丈夫の失徳なく、一生の事業も悉く慈愛の心腸より溢れ出づること嬢の如き、是実に類希なる主の使女と云ふべき者に非や」(p.2)。これはタイムズ基金責任者マクドナルドの評に近い。「主の使女」という語句が単なる修辞なら、これも的確な評価というべきだろう。

(4) C. カルクス著、北山初太郎訳『フロレンス・ナイチンゲール』(1890) C. カルクスはナイチンゲールをふつうの女性とあまり変わらない境遇にあった人として描く。「フロレンス、ナイチンゲールは、其の生活の度、通例の婦人を去ること甚だ遠からず。之と感を同ふし志を共にし、また之を同一の事業をなさんと欲するも、敢て望む可からざることと見へざるなり」(pp.2-3)。ナイチンゲールは女性の王族や政治家とちがって、他の女性が置かれた境遇と大きく違わない人である。だからこそ人びとの模範になりうると説く。

C. カルクスも他の伝記と同じように「閑暇なるときは父が所有地に住める貧民を訪問し、補助し、若しくは慰むることを怠らず」という逸話を語るが、力点は別のところにある。「フロレンス、ナイチンゲールはクリスト教徒にして、最も敬虔なる婦人なり。彼は幼年のとき及び青年の時に於て、最も篤く奉戴せる宗教によりて人を愛するの精神を鼓舞せられたり」という宗教的な観点からの説明がそれである。彼女の強い意志は「通常婦人の手に落つ事業の区域を以て満足せず、更に広闊なる工場を得んことを望」んだ。しかも同情心だけで人を救えないことも承知していた。「彼れ自ら以為く、縦令慈悲の情あり、天然の才能ありと雖も、実施の錬磨なくては其目的を達すること能はざるべしと」。そのためにカイゼルヴェルストの施設では「普通の下婢の如く、有らゆる下司のわざを自ら執る」の労を共にしたのだった。「斯の如くせざれば、看護の修業をなすこと能はぬことを自覚していたからである。これこそキリストの精神を受け継ぐものである。「彼は雄々しくも、みな之を忍べり。主は人類の為に天より地に降り、身を卑ふして之を救へり。フロレンス、ナイチンゲールは、実に此の模範に従はんと決心したるなり」(pp.11-12)。こういう観点に立てば子どものときから慈悲深かったなどという説明は不要になる。C. カルクスがここから引き出す教訓は、「其の平生の持論に云く、若し婦人にして大業を企てなば、男子に劣らず之を全く成就するの資格を養成せざるべからず」(pp.23-24 ぺ)。女性であっても社会的な事業を成就しようとするなら、男性と同じようにそのための訓練を積むべきだという教訓である。

野戦病院での活躍についてはマクドナルドやキングレークの記事を引用し、「フロレンス、ナイチ

ンゲール女が泰然として側らに立ち、其苦を共に分ち、明に看得べき思い遣りの情を以て、痛みを偕にするを見るときは、みな心を平げ、非常なる勇気を顕して、忍耐をなしたりと云ふ」とあるだけで (pp.20-21)、病人の看病をしたとしか書かれていない。しかしナイチンゲールのこの活動が赤十字社の先駆となったと解説され、ナイチンゲールが尊敬されているのは彼女の後に続く者があるからだという重要な論点も示されている。「彼が最も大なる栄誉は、其の跡を慕ひその業に倣ふの多きことにあり。今や英国に在りては、富者、高貴の人も、彼等の華美なす家を出で、病院に寓居して、看護者たるの準備をなすことを恥とせず。実にナイチンゲール女の轍を踏まんと欲するものは、百を以て数るに至れり」(pp.32-33)。これは一宗教としてのキリスト教を越えた普遍的な論点であって、そのために優れた伝記となっている。

(5) 竹越竹代『婦人立志篇』(1892)は、吉川(1982)も指摘するとおり、明治期のナイチンゲール伝としては徳富蘆花「修羅場裡の天使」と並ぶ最高の水準にある。この記事の特色は他の伝記が採らなかつた独自の資料に基づいている点にある。ナイチンゲールが看護活動を生涯の職務とした理由については彼女自身の言葉によってこう伝えている。「此くて其益々生長するに従つて、倦まざるの精力、事業を企するの気象大に発達し、通常郷紳士の家に落ち来る安逸なる事業には満足せずして、他の事業を求めて止まざるに至れり。彼女の記録に『為すべき値ある事業は何にても為さざるはなくして〔中略〕男女の生涯に於ける幸福と調和は、我等の休暇の時に我等の最高なる能力を使用する道を求め出すにあり』と云へるは、以て其如何に気力の活発にして、安逸に耽らざりしかを見るべし」(p.85)。〈人生における最高の幸福とは自己の最高の能力を発揮できる機会を得て、そこにすべての時間を投入できるところにある〉とは、ナイチンゲール自身の言葉を借りただけあってさすがに迫力がある。この言葉の出典はおそらくはナイチンゲール著「ユナとライオン」であろう。これはフローレンス・ナイチンゲールが最も信頼を寄せていた教え子、アグネス・ジョーンズへの追悼記事で、1868年6月雑誌『Good Words』に掲載された。1871年にはアグネスの姉の手になる『アグネス・エリザベス・ジョーンズの思い出』の序文として出版され、翌1872年には『ユナと貧民たち アグネス・ジョーンズの思い出』と題して米国版でも出版された。ナイチンゲールは「ユナとライオン」中で、自らが切り拓いてきた新しい時代における看護について、女性がこの職務を担う社会的意義を説き、同時にそれは高度に専門的な訓練を要する手技である<sup>アート</sup>と説明し、〈新しい時代の看護者、アグネス・ジョーンズに続け〉と呼びかけている。ナイチンゲールは生前自分自身のことを書かなかつたし、他人にも書かせなかつたが、最愛の弟子の死に臨んであたかも自らが自らの追悼文を書いているかのようにも読める。

竹越の記事が「ユナとライオン」を典拠にしていることは、その記事の中に明記されている。「女史はまた『善き言』と題する小冊子を公にし、其後進の友ジョーンズ嬢の美なる性質と小伝とを記して、英国の婦人がジョーンズ嬢に倣ふて公事に勇ましく、看護衛生の事を心得て世を益すべきを勧めたり。女史が一生の主義は、其女史の行を譏謗する者に答へたる左の言を見るべし、誠に美々しく且つ勇ましく、恰も風吹き雨打つ中に立ちて動かざる女史の姿を見るかききものあり。善良なる事業に同情を表するは幸福の要素なり〔中略〕吾等が楽しき道(余は之を幸福とは呼ばず)『世の誉』と云

ふ言を以て賞美せられ、阿諛せらるゝ所の安逸なる道を捨て、絶えず疑惑ち注意と心配を免れざる困難なる事業に加りたるは、唯正理と義務の念よりして然るなり、[中略] 正理と義務のためには余等は数ば々々二三の人と衝突すのみならず、凡ての人と衝突するも已むを得ざるなり」(pp.96-97)。

竹越の記事は「ユナとライオン」の趣旨は汲んでいるものの、原文とはずいぶんちがっている。おそらく「ユナとライオン」を要約した英文記事が別にあって、竹越はその資料を元に行っているのだろう。それにしても〈ナイチンゲールと他の貴婦人とのちがい〉は次のエピソードからも明かである。「余暇ありてかの余暇を公事に用ひんと欲する婦人に対しては先つかの事業に向つて御身の資格を整へて、男子が其事業を為すが如くなるべしと申上べく候。御身若し男子の為すべき事業に当らんと思はゞ、婦人の特権を求め給ふ勿れ。即ち不十分、微弱、愚昧、此等のものは婦人の特有質なりとて、事業上に此等のことあるも尤の事なりと宥怨を求め給ふ勿れ」(pp.86-87)。〈貴婦人の女々しい口実〉をC.カルクス以上に痛烈に批判している。

竹越は「今や文明国をして婦人看護の事あらざる所なきに至り、幾千万人の死亡者を救ふに至りも、女史が一世の流行に逆ふて始めたの例より出るとせば、女史の名が何れの処として唱へられざるなきも亦た宣なると云ふべけれ」とまとめている (p.98)。ナイチンゲールは〈一世の流行〉に逆らい、〈世の誉〉とまわりから賞美される道を選ばず、〈阿諛せらるゝ所の安逸なる道を捨てて〉、婦人看護に新しい時代を切り拓いた。〈あまた貴婦人の候補がある中でなぜナイチンゲールでなければならなかったのか〉は、この記事では明らかである。

野戦病院での活動については、「フロレンスは是等の人々を率ひて戦地に渡り、散乱せる事務を整へ足らざるを補ひ、未熟の婦人を教育し、また自らは率先して荒々しく穢なき男子の濃血を洗ひ、傷骨をとゝのへて、他人の傷痕を見ること己が傷痕を見るがごとくにいたはりしかば、荒々しき朔風に吹かれたる戦陣も忽ちにして時ならぬ春風に遇へるが如く、幾百千人の兵士、非命に死することを免れ」と書く (p.91-92)。看護だけでなく病院の管理、新人看護婦の教育にも携わったこともしっかり書き込まれている。そしてその結果、「幾百千人の兵士が死するを免れた」と。残念ながらこれは事実に反する。

(6) 徳富蘆花「史談 修羅場裡の天使」(1892)も優れた伝記だが、しかし竹越ほどは明確には〈他の貴婦人とのちがい〉を描いていない。「女史の天職は已に其の幼児に定まり居たりし」というおきまりの説明を抜け出していないうえに (1892a,p.12)、「富裕なる英国田舎紳士の家に生まれて華奢安逸渾て意の如くなりし女史は、此等のものを塵よりも軽く棄て去て、遍く世の痛苦者疾病者の友たらむと」したというが、その理由は相変わらず不明である (1892b,p.9)。

ただしナイチンゲールはクリミア戦争に従軍するまえに10年以上自ら研鑽を積んだことを強調し、「知る可し。ナイチンゲール女史の成功は、十年の準備先づ其資格を作り、事務技術及鋼鉄の意志を以て之を進捗したるが為めにして、徒善は決して女史の成功の原にもあらず、亦渾ての慈善博愛の事業の原にもあらざることを」と、いたずらな善意だけでは博愛慈善の事業といえども実現しないと鋭く説いている。「女史、嘗て人に書を与へて曰く、渾て一の事業に就かんと欲する妙齡の淑女諸君に向つて余は一言述べんとす。男子が其事業の準備を為す如く、諸君も亦先づ其事業を為すの

資格を作れ。然らずして事業を為し得るなど、思ふ勿れ。亦諸君若し男子の事業を為さんと欲せば、女子の特権—不精密、荏弱等の特権を貪求する勿れ」との一節は(1892b,pp.9-10)、竹越竹代『婦人立志篇』の一節と同趣旨。『婦人立志篇』には徳富蘇峰の「序」が付されていたくらいなので、徳富廬花も竹越のこの一節を承知していただろう。もし竹越に依拠してこの一節をわざわざ引用したのなら徳富廬花の慧眼というべきだろう。

野戦病院での活動について、徳富は「此莫大の患者を引受けし女史の労果して如何」と、ナイチンゲール看護団の功績に鋭く注目している。「女史は実に其身体の虚弱なるにも関せず、麾下の看護婦を指揮し、院内を巡視し、衣糧薬を世話して、一連に二十時間も立ちつゞけることもあり。天使の如く柔和なる仁徳の光と黒鉄の如く堅硬なる意思の力とを以て、沍寒の冬と戦ひ、運搬の不便と戦ひ、大混乱大錯雑と戦ひ、斯くて呻吟、怒罵、呪詛、汚穢、飢餓、悪疫を以て満たる戦地病院は、月を出でずして清潔にして秩序整たる天晴文明国の仮病院に慙ざる者となりぬ」。単に病室を廻って看病していただけでないことを克明に伝えている。そして「手負病者の看護は云ふも更なり、万の悪疫伝染疾の原因を搜りて之を除く、皆女史の務むる所なりき」(pp.8-9)。死亡率を低下させたとは明記していないが、院内感染の原因を突き止め衛生状態を改善したとある。残念ながらこれも事実反する。

(7) 安孫子貞治郎訳「フロレンス ナイチンゲール」『人道之偉人』(1901)も、「倫敦最大の旅館セントトーマス館に宿せし人は必ず知らん、慈悲の光を表象せるランプを手にせる高尚優麗なる貴女の塑像が其大広間に飾られあることを、これ即ちクリミア戦争に於て、慈悲と愛との働をなせし、負傷者救護の天使フロレンス ナイチンゲール嬢肖像なり」と始めている(pp.79-80)。

クリミア戦争前のナイチンゲールについては説明がない。「ナイチンゲール嬢が看護婦事業を実行せしに就いて注意すべきは、クリミア戦争負傷者救護を英国陸軍省が嬢に依頼せし以前に、此事を嬢より申込みたりし一事なり」とある(p.80)。けれども派遣志願者はナイチンゲール以外にも大勢いたのだから、なぜ英国陸軍省は他ならぬナイチンゲールに依頼したのか。この点についての説明はない。

この伝記は「ニューヨーク エベリング ポスト」を主な情報源にしており、それまで日本に紹介されたことのない内容、たとえば「薬品庫を斧で叩き壊させる」という衝撃的なエピソードを載せている。「予は当時嬢に就て下の如き逸事を聞けり。一日俄に薬品の必要起れり。当時の規則は薬庫の錠は医師に賦与し、医師の不在には薬庫を開くこと能はずなれり。嬢は沈思黙考の末、命令を下して斧を以て扉を破らしめて薬品を取出だし、以て急を救ふことを得たり。思ふ、頑強の武夫斧を持して戸側に立ち、細き柔なる而も遠くへ透き徹る声が開けと命令を下したる当時の形状を。而して、又杓子定木の弊は確かに此教訓によりて認められたることを」(p.86)。同様のエピソードはクック第1巻にもある(p.273)。病人の看病だけでなく、医薬品、食料、衣糧の調達まで彼女が担ったことを印象的に示すエピソードである。

死亡率の変化については、「米国々会議員アリジノ州知事、リチャード シマツ コーミツク」の伝えるところとしてこう書いている。「クリミア戦争にて死亡せし数は、予は詳く知らざれども大

凡四万四千にして、内一万人は戦場にて、九千八百六十人は赤痢にて、九千百八十人は下痢にて、四千七百六十人は熱病にて、一万二百人はリヨウマチ又は寒さに冒され又は衣食の不完全にて死せしものにして、此最後の者は若しナイチンゲール嬢が初より居りしならば避け得ることの出来し病なりしなり」(pp.86-87)。ナイチンゲールがもっと早く到着していれば寒さに冒され、衣食の不完全なために死亡した1万人は救われただろうとの評価である。4万4000人は英国軍の全動員兵数に匹敵し、死亡者数を完全に誤認している。それともこれは英仏露土を含めた死亡者数か。

またこの伝記は「ユナとライオン」からの一節、〈看護は専門的な<sup>フート</sup>手技である〉という一節を引用している点で特徴がある。「嬢が彼の如き成功をなせしには、如何なる心掛を有したりしか、彼は自己の考えを下の如く言へり。曰く、看護は一の技術なり、故に看護婦たるものは画工若くは彫刻家の如く、全身を斯業を投じ、而して大なる準備を熟練をとを要す。看護婦が画工若くは彫刻家よりは更に大なる準備と熟練とを要する所以は、彼は紙又は金石なす死物に対し、此は神の宮なる靈活の生物に対するとを以てなりと」(p.88)。

(8) 勁林園主人『西洋傑婦伝 第二編 ナイチンゲール』(1901)はナイチンゲールについての初めての本格的な単著で、ナイチンゲールの活動を当時の新聞記事を多数忠実に引用しながら紹介している。クリミア戦争の原因についてもロシアの膨張政策と絡めて解説している。後半は日本赤十字社と赤十字条約の解説に充て、津田梅子、安井哲子、高山盈子、石黒忠恵らのインタビューを収録するなど、ナイチンゲールと赤十字に関する総合的な情報源となっている。

この伝記は「ナイチンゲールの修養」という見出しを設け、ナイチンゲールの看護研究の動機を説明しようとしている。そしてここで「彼女は幼きより熱心なる耶蘇教信者なりしが、之を信ずるの念は年の長ずると共に益長じにき。[中略]身は栄耀富豪の家に生まれ華奢逸楽意の如くなるを、彼女自之を避けて、世の浮華なる交際場裡の悪風に染まず、卓然として上流婦人社会より離れ居たる」と(p.17)、熱心なクリスチャンだったという理由を持ち出している。C.カルクス(1890)と同じくキリスト教的博愛精神に依拠してナイチンゲールの献身を説明しようとしている。

カイゼルヴェルストでの研修については次のように描く。「ナイチンゲールの入学せし看護婦学校の日課は甚困難なるものありき。学科程度の高きにはあらず、寧ろ力役に於て易からざるもの多かりしなり。此校に入るの生徒は普通の下婢の如くに、あらゆる下司の業、あるいは各般の荒仕事をなさざるべからず成規なりき。若しこれをしも堪へ忍ぶ能はずは、到底看護なる勤務は遂げ能はずとするものなりき。されば、富裕の家に生まれたる体軀軟弱の人にとりては、殆、堪へ難きの苦業に属せるなり」(p.27)。どうしてまた裕福な貴婦人が「下婢の如くにあらゆる下司の業」を敢えて執らねばならないのか。そうでなければとうてい看護という任務を習得できないからである。では「将また何を苦んでか敢て斯の事に当らんとはする」。はっきりとこの疑問が立てられ、そのうえで「然り、常人の見を以てすれば則然り。只彼女の胸中には一片慈愛の焰の炎々として燃ゆるものありて、此の鮮にして清き熱火は、彼を駆て遂に甘じて彼女に苦楚を受けしむるに至らしめたるなり」(p.29)と解く。キリスト教文化圏の中にある者にとっては了解可能な説明だろう。

しかも編者はただ宗教的な熱意を強調するにとどまらず、〈慈悲心がどれほど深くても現実的な技



術を習得しなくてはいかなる災禍も克服できない」という、さらに普遍的な教訓をここから導いている。「[ナイチンゲールが] つらつら考ふるやう『縦令もし無量慈悲の情あり、之を遂行するに熱心なりとも、実地に習得錬磨して、之が充分の知識と手腕とを具ふるにあらずんば、到底其目的を達し難く、事画餅に属するに至は明白の道理なり。実行の前に準備ある物皆然り。いかで己之を怠るべけんや』とて、是より一意専念斯業の研究に余念なく、修行十年。以て、他日の大準備をぞなしたるける。」(p.20)。〈実行の前に準備あり〉として、後になって日本の検定期の教科書に採録される逸話である。

次の手紙はC.カルクス(1890)、竹越竹代(1892)、徳富廬花(1892)、本田憲之(1903)、三浦秋水(1904)も引用する手紙だが、出典は明らかでない。「彼女がこの救済院に尽瘁せる間のことなりき、一日書を裁して親しき友垣に申送るやう。予は世に一事業をなさんとする妙齡の淑女に向つて一言を述んとす。熟ら男子の事を企つる様を見るに、必ず之に適ふべき準備あり〔中略〕これと同じにて、女子も亦最初に其の資格を作りて、而して後志す事業に取り掛らんことを順序とす」(p.32)。「ユナとライオン」には「婦人の生涯における災難の四分の三は、男性にとって必要不可欠と考えられている訓練という規律を自分に課さなかったために起こっている」とだけあって、それ以上の記述はない(p.257)。ナイチンゲールがハーレーにあった施設の管理にあたっていた時期、若い貴婦人に宛てたというこの手紙については、クックの伝記にも、セシル・ウッドム・スミスの伝記にも言及がない。出典はともあれ、ナイチンゲールが〈ノーブレス・オブリージュ〉の範疇にあることしかできなかった貴婦人のうちの一人でなかったことは、明らかにされている。

戦死者については「<sup>あ</sup>吁クリミア戦争の死亡者二万六千五百六十八人、戦死は僅に二千五百九十八人、其他残り一万八千五十八人の兵は実に銃剣持たぬ劇しき病魔と戦ひて斃れしなりき」と記している(p.55)。戦死者2598人に「その他」18058人を足せば、20656人になるはずで「死亡者2万6千056人」は粗忽な誤記。(徳富1894b)には「クリミア戦争中死亡者20656人」とある。

ナイチンゲールが携わった業務を象徴するものとして〈薬品庫を斧で叩き壊させる〉挿話を引用している。「或時俄に薬品必用のこと生じて、之を求めれば、折節医師は不在なるに、薬庫の錠は医師の手に付与せられて、他人は之を開く能はざるの詭なり。去れども此場合は一刻も猶予の出来ぬ時なり。彼女は暫打案じて居たりしが、遂に斧を以て扉を破らしめて薬品取出し、以て其急を救ふことを得たりき」(p.76)。そのうえで「彼女の一隊が野戦病院に来てより表したる功績は左のことにもよく証明し得らるなり。即スカッタリの病院にて死者の割合は百に対する四十二なりしものが、後には僅に百に対する二の割合に減じ、又其死亡者の最多数なりし当時は百に六十なりしものが、戦争の終末には百に一強の比例を示したりとは実に驚嘆すべきの偉勲ならずや」と書き(p.92)、死亡率を激減させたのはナイチンゲールの管理能力のおかげだと評価している。死亡率が42%が2%に減少したという数値は、戦後ナイチンゲール自身が統計を整理して証明したもの。そしてその功績は看護団ではなく、衛生委員会に帰せられるべきことを、彼女は戦後設けられた委員会で証言している。

(9) 根本正訳「欧米女子立身伝」(1906)は、ナイチンゲール看護団の歴史的意義を正確に評価

している点で注目に値する。ここには〈クリミア戦争におけるナイチンゲール看護団の成功があった初めて今日のような女性の誇りある職務としての看護婦像ができあがった〉と明確に書かれている。「ナイチンゲール女史の出発は英国一般人民の注意を惹起<sup>ひきおこせ</sup>り。蓋し婦人看護隊の戦地へ出張するは空前の珍事に属すればなり。ゼームソン夫人曰く、『看護婦隊の今回戦地へ出張せるは我英国の習慣上に類例なく珍事にして、寧ろ婦人の習俗に背反するものとす。併しそは兎も角も、ナイチンゲール嬢の運動にして成功せば、嬢の名誉は永世不滅なるべきのみならず、之に由て英国婦人社会に固着せる従来の陋習と偏見は打破せられ、婦人の地位に一大変動は来るべし』と。然りナイチンゲール女史は成功せり。而して其成功により婦人社会の地位は漸次に改善向上せり」(pp.117-118)。根本はこれに加えて、日本でも女性の働くべき場所は家庭の中だと言われてきたが、それは間違いだと書く。「古来より女史の職務は戸内に限らるゝが如く云はつれど、此れ畢竟支那流の僻見なり」(p.119)。

## 第2節 日本におけるナイチンゲール伝説の継承

以上見てきたように、当時の日本の伝記作家にとって「上流階級に生まれ育った若い女性がなぜ看護の仕事に従事しようとしたか」については謎のままだった。しかしそれは本国英国においても事情は同じであった。むしろ道徳教材史研究の上で着目すべき点はナイチンゲールの事跡が歴史的な事実に反しないで説明されていたかどうか、そしてその上で当時の人びとにとって道徳的指標として納得できる文脈でその事跡が提示されていたかどうかにある。この点に関していえば、今回われわれが検討した26本の記事のうち、これまで挙げた少なくとも9本の記事は「何故ナイチンゲールが看護団の団長に任じられたのか」について納得できる説明を下していた。しかもその歴史的事実だけでなく、その事実に含意された道徳的意義についても、当時の人びとにとってそれなりに納得のできる根拠が示されていた。「女性が本来の意味で社会に貢献ができるかどうかはその者の地位や年齢や階級に関係なく、〈すべてのイブの娘〉に備わった特性を活かすことにある。忍耐と熱意と誠意とをもって臨むに値するその職業は女性らしくかつ愛情に満ちたものである。それは裕福な者だろうと貧しい者だろうと、共になし得る仕事である。このことを世界に示した人。その人は誰か？と尋ねられれば、わたしはそれはフローレンス・ナイチンゲールその人だと答えよう」(『女学雑誌』1887, pp.2-3)。「彼女は謙遜—というよりどちらかというの内気な人だが、しかし自分の信念にもとづいて行動していた。優しく上品でありながら、しかし多くの人を指揮し事業を的確に管理する能力を備えていた。それでも〈男まさり〉という不評を買うことなく、一生の事業はことごとくみな、彼女の心底から湧き出る博愛の情からのものだった」(『国民新聞』, 1890, p.2)。こうした主旨を汲めばナイチンゲールの事跡は女性の社会的進出を後押ししようとする文脈の中で語られていたこと、そしてその女性の社会的進出を実現するために求められる道徳的な条件を明示しようとしていたことは明らかである。われわれは、英国におけるナイチンゲール伝説は日本においてもそのままの形で継承された例があった、つまり道徳教材として破綻することなく、それなりに合理的な文脈の中で受容され紹介された例が少なくなかったと

結論してよいだろう<sup>2</sup>。

さらにナイチンゲール伝説の継承という点で重要なのは、ナイチンゲールは旧来の規範、道徳に反逆しながら新しい時代を切り拓いたという道徳史上の意義を適確に指摘する著者たちが日本にもいたという点である。その代表的な例を現代語訳すれば以下のとおり。

「社会の善良な事業に参画できるのは幸福の限りである。わたし〔フローレンス・ナイチンゲール〕は享樂的な暮らし（わたしはこれを〈幸福〉とは呼ばない）、世間の評判、人びとのへつらい、追従に満足しているお気楽で安易な生活を捨て、それに代わって絶えずストレスにさらされ、注意と心配を免れない事業に加わることになった。その理由は人間として正しい道を歩み、自らの義務を果たしたいという気持からだ。……人間として正しい道を歩み、自らの義務を果たす。そのためわたしたちは幾人かの人たちと衝突するばかりか、全人類を敵にまわして衝突することすら、止むを得ないのではあるまいか」（竹越竹代、1892、pp.96-97）。

「今や文明諸国において婦人看護の事業を実施しない国はなく、これによって幾千万人もの死亡者が救われることとなった。しかしそれはナイチンゲール女史が世の風習を打破し、自ら切り拓いた道であった。なればこそ彼女の名前が文明各国において顕彰されるのも、また当然というべきであろう」（竹越竹代、1892、p.98）。

「今回、戦地に女性看護婦を送るとのことだが、これはわがイギリスの歴史に例を見ない、まったくの珍事である。いや、むしろ『善良なる婦人の習俗』と言われるものに違反する事業であるともいわれている。しかしもしナイチンゲール女史のこの事業が成功すれば、それによって彼女の名誉は永世不滅のものとなるだけでなく、これによって英国女性界を支配している古い習慣や偏見は打破され、女性の地位は大きく前進向上するであろう」（根本正訳、1906、pp.117-118）。

新しい価値を創造するためには旧来の価値を破壊する必要があったこと。そうした創造的破壊を一個人が実践するにあたっては、従来よりもさらに高い理念が求められたこと。その後の多くの継承者が現れたらこそ、それは新しい価値として社会に認証されるにいたったこと。こうした道徳史上の重要な契機について、どこにどんな記述があったのか、そのいちいちの箇所をここではくり返し示さないけれども、それらが間違いなく指摘されていたことはすでに引用したとおりである。

なお「ナイチンゲール看護団は野戦病院でどんな活動を行ったのか」という問いへの説明については、今の段階では「その評価は著者によってまちまちだった」としか整理できない。この点については国定修身教科書の記述を対象とした論考で改めてとりあげる。

<sup>2</sup> 英国におけるナイチンゲール伝説の具体的な内容については、松野 修「英国におけるナイチンゲール伝説の形成」『愛知県立芸術大学紀要』No.41（2012）を参照のこと。

## 文献一覧

- ・『女学雑誌』(1886)：筆者不詳「新報 京都看護病学校」『女学雑誌』第26号，1886(明治19)年6月15日。
- ・『女学雑誌』(1886a)：筆者不詳「佳伝 ナイチンゲールの伝 第一」『女学雑誌』第31号，1886(明治19)年8月5日。
- ・『女学雑誌』(1886b)：筆者不詳「佳伝 ナイチンゲールの伝 第二」『女学雑誌』第32号，1886(明治19)年8月15日。
- ・『女学雑誌』(1886c)：筆者不詳「佳伝 ナイチンゲールの伝 第三」『女学雑誌』第37号，1886(明治19)年10月5日。
- ・『女学雑誌』(1887)：筆者不詳「佳伝 ナイチンゲールの伝」『女学雑誌』第85号，1887(明治20)年11月9日。
- ・『国民新聞』(1890)：筆者不詳「フロレンス。ナイチンゲール」『国民新聞』第62号，1890(明治23)年4月3日付録。
- ・大竹(1890)：大竹多気「ナイチンゲール嬢の事を記す」『少年園』第4巻第44号，1890(明治23)年8月。
- ・北山(1890)：C.カルクス著，北山初太郎訳『フロレンス・ナイチンゲール』秀英舎刊，1890(明治23)年11月。
- ・『日本赤十字』(1892a)：筆者不詳「フロレンス，ナイチンゲール嬢小伝一」『日本赤十字』第1巻第5号，1892(明治25)年5月。
- ・『日本赤十字』(1892b)：筆者不詳「フロレンス，ナイチンゲール嬢小伝二」『日本赤十字』第1巻第7号，1892(明治25)年8月。
- ・『日本赤十字』(1892c)：筆者不詳「フロレンス，ナイチンゲール嬢小伝(其三)」『日本赤十字』第1巻第8号，1892(明治25)年9月。
- ・竹越(1892)：竹越竹代『婦人立志篇』警醒社刊，1892(明治25)年11月，国立国会図書館近代デジタルライブラリー所収(以下「D.L.M.E.」と表記)。
- ・北山(1892)：C.カルクス著，北山初太郎訳『西洋徳婦美談』北山初太郎刊，1892(明治25)年1月。
- ・徳富(1894a)：徳富廬花「史談 修羅場裡の天使(上)(ナイチンゲール女史の事跡)」『家庭雑誌』第4巻第36号，1894(明治27)年8月。
- ・徳富(1894b)：徳富廬花「史談 修羅場裡の天使(中)(ナイチンゲール女史の事跡)」『家庭雑誌』第4巻第37号，1894(明治27)年8月。
- ・徳富(1894c)：徳富廬花「史談 修羅場裡の天使(下)(ナイチンゲール女史の事跡)」『家庭雑誌』第4巻第38号，1894(明治27)年8月。
- ・松平(1896)：松平丞丞「ミス，ナイチンゲール」『日本赤十字』第42号附録，1896(明治29)年1月。
- ・徳富(1898)：徳富廬花『世界古今名婦鑑』1898(明治31)年5月，民友社刊，D.L.M.E.。
- ・村田(1898)：村田勤『古今仁人伝』警醒社書店刊，1898(明治31)年12月，同志社大学所蔵。
- ・開拓社(1900)：開拓社編『東西 名婦の面影』開拓社刊，1900(明治33)年5月，D.L.M.E.。
- ・中内(1901a)：中内蝶二「史伝ナイチンゲール女史 上」『女学世界』第1巻第7号，1901(明治34)年。
- ・中内(1901b)：中内蝶二「史伝ナイチンゲール女史 下」『女学世界』第1巻第9号，1901(明治34)年。
- ・永山(1901)：永山盛良編『泰西名婦伝』，勢陽堂刊，1901(明治34)年3月，D.L.M.E.。
- ・安孫子(1901)：安孫子貞治郎訳，中村諦梁記「フロレンス ナイチンゲール」『人道の偉人』東京評論社編，中庸堂刊所収1901(明治34)年5月，D.L.M.E.。
- ・勁林園(1901)：勁林園主人『西洋傑婦伝 第二編 ナイチンゲール』東洋社刊，1901(明治34)年7月。
- ・中村(1901a)：中村勁林(勁林園主人)「史伝 ナイチンゲール女史」『女子の友』東洋社刊，第95号，1901(明治34)年7月
- ・中村(1901b)：中村勁林(勁林園主人)「史伝 ナイチンゲール女史」『女子の友』東洋社刊，第96号，1901(明治34)年8月
- ・中村(1901c)：中村勁林(勁林園主人)「史伝 ナイチンゲール女史」『女子の友』東洋社刊，第99号，1901(明治34)年11月
- ・マーデン(1903)：マーデン著，中村敬三訳『品性之修養』大日本実業学会刊，1903(明治36)年9月，D.L.M.E.。
- ・松濤(1903)：松濤庵「修養時代のナイチンゲール」『女鑑』国光社刊，第13巻第20号，1903(明治36)年10月。
- ・加藤(1903)：加藤眠柳(米司)『女子立志編』内外出版協会刊，1903(明治36)年10月，D.L.M.E.。
- ・本田(1903)：本田憲之『赤き十字架』警醒社刊，1903(明治36)年11月，D.L.M.E.。
- ・三浦(1904)：三浦秋水(覚玄)『戦争と婦人』文明堂刊，1904(明治37)年3月，D.L.M.E.。
- ・根本(1906)：根本正訳「欧米女子立身伝」吉川弘文館刊，1906(明治39)年4月。
- ・帝国廃兵慰藉会(1906)：帝国廃兵慰藉会編纂『日本赤十字社発達史』帝国廃兵慰藉会刊，1906(明治39)年12月。
- ・下田(1908)：下田歌子『大和なでしこ臨時増刊 近世名嬢伝』第8巻第11号，大日本女学会刊，1908(明治41)年9月。

- ・中村（1910）：中村勤林編訳『西洋傑婦伝 第二編 ナイチンゲール』増訂七版，東洋社刊，1910（明治43）年8月。
- ・村田（1910）：村田 勤『フロレンス・ナイチンゲール』警醒社刊，1910（明治43）年8月。
- ・松浦（1911）：松浦政泰『婦人美譚 下巻』精美堂刊，1911（明治44）年11月。